

# ロシア連邦における民族語をめぐる諸問題の社会言語学的考察

## —サハ共和国を例として

文学研究科社会学専攻博士後期課程在学

南 謙 吾

Kengo Minami

序章	130
I. サハ共和国の概要・歴史的背景	130
II. 言語法の改正～新生ロシアの言語政策	133
III. サハ共和国における法的基盤、言語法	134
IV. サハ共和国の言語状況と諸問題	135
4-1. 国勢調査を中心とした現状の分析	135
4-2. 国勢調査と母語意識	137
4-3. サハ共和国独自の言語政策とその背景、狙い	139
4-4. 言語政策の実績、動向	144
終章	146
注	148

## 序章

ソ連が崩壊して20余年が過ぎ去った。かつてのソ連を構成していた15の共和国や、現在のロシア連邦を構成する連邦構成主体において、民族語を取り巻く環境や言語政策は様々な局面を迎えている。とりわけロシア語の言語地位の高さの前に、言語使用の機会や機能を失った言語、ひいては消滅の危機に瀕している言語すら存在している。近年、消滅の危機にある言語話者の居住地域を「言語のホットスポット<sup>1)</sup>」とする概念が登場し、消滅寸前の言語が集中する地域を顕在化させ、言語保存、研究に役立てようとするという試みがなされている。その「言語のホットスポット」を表した地図には、現ロシア連邦内のシベリア地域の多くが該当しており、言語保存に向けた対策が急がれている。

これまでもソ連を構成していた共和国における民族言語問題は多く取り上げられて来たが、ロシア・ソビエト社会主義連邦共和国(РСФСР<sup>2)</sup>)を構成していた自治共和国における民族言語問題には、なかなかスポットが当たってこなかった。本論ではその一つであり、先述の「言語のホットスポット」を擁する地域の一つでもあるサハ共和国(ヤクーチヤ<sup>3)</sup>)に着目した。サハ共和国は、ソ連時代はヤクート自治ソビエト社会主義共和国(ЯАССР<sup>4)</sup>)と呼ばれ、その言語状況は革命をはじめとするソ連の様々な社会情勢に大きく左右されてきた。

サハ共和国は現在のロシア連邦の連邦構成主体の中で最大の面積を有しており、それゆえ多数の民族と言語が存在する。現在サハ共和国の国家語はロシア語とヤクート語、いわゆる北方少数民族の公用語としてエヴェンキ語、エヴェン語、ユカギール語、チュクチ語、ドルガン語が定められているが、公用語の幾つかは消滅の危機に瀕している。

本論ではサハ共和国におけるロシア語と民族語が置かれた現状と歴史を社会言語学的観点からとらえ、残存する民族語をめぐる諸問題解決へ向けてどのようなアプローチが可能かを考察するものである。

## I. サハ共和国の概要・歴史的背景

サハ共和国のサハとは、かつて中央アジアやトルコ地域に居住していたチュルク系民族の言葉で「端・縁」という意味の自分たちの呼称 *jaxa[yaqa]* に由来しており、サハ共和国とは *jaxa* 人の国ということになる(それが訛ってロシア語では *якут[yakut]* となった)。10～15世紀頃、中央アジアに居たヤクート人の祖先にあたる騎馬民族が、民族抗争の結果草原を追われ、バイカル湖をさらに北上し、レナ川中流域で現在のヤクーツク市にあたる地域を中心に街を作り発展した。そこへ毛皮を求めてやってきたコサックと共に形成した要塞都市がサハ共和国の起りである、というのが通説である<sup>5)</sup>。かつてそこに居住していた原住民のエヴェン<sup>6)</sup>人やエヴェンキ人(どちらもツングース・ウイグル系の言語を話す)などを追い出して国を作ったことと、極端な寒さが原因で他の入植者が入って来なかったこ

とから、現在もヤクート語話者の居住地域は、バイカル地域を挟んで、ユーラシア大陸におけるチュルク系言語の飛び地のような状態になっている。この飛び地はヤクート人の北上と共に拡大し、北極海沿岸部まで広がった。その過程でヤクート語はかなり多くの言語と接触しながら飛び地となったため、他のチュルク系言語にはない古い格変化を残している<sup>7</sup>。

17世紀には帝政ロシアからロシア人が入植し、多くのヤクート人がロシア正教に改宗したが、現地で主流だったシャーマニズム信仰との二重信仰が普通であった<sup>8</sup>。ロシア正教の布教と同時に、ロシア語やキリル文字がヤクート人の居住区域に広まり、革命前の段階で、キリル文字表記のヤクート語で書かれた書籍や新聞もかなりの数が発刊されていた。

1917年ペトログラード(現サンクトペテルブルク)での二月革命に関する報道が、約1週間遅れで届いたヤクーツク市でも、中央からの命令を受けすぐに自治共和国の設立に向けての準備が進められた。当初は「経済活動の観点から、ヤクート人による自治は難しい」と見られていたが、レーニンの意向を受けた中央からの強い推薦により、1922年ヤクート自治ソビエト社会主義共和国(ЯАССР)が成立することとなった<sup>9</sup>。

1926年にはヤクート自治共和国独自の言語法が制定され、自由な言語選択が保証された。また北方少数民族<sup>10</sup>の母語教育の拡充もされた。同年、革命後初めて行われた国勢調査の結果によると、ヤクート自治共和国の人口約28万人の内、約83%がヤクート人によって占められていた。しかし帝政時代から流刑地として用いられていたことに加え、ロシア人を主とするヤクート自治共和国外の民族との経済活動の規模が拡大していくにつれ、国内のロシア人の割合も同時に増加していった。また、自治共和国設立当初から問題視されていた、軍事との兼ね合いの面からも、ロシア語の必要度は高まっていた。

ヤクート自治共和国でも他の連邦構成共和国や自治共和国と同様に、1920年代から民族文化を重視した政策が取られるようになり、教育も大きく見直されることとなった。1929年度から、ヤクート自治共和国の4年生までのすべての生徒が民族語での教育を受けられるようになり、1934年度から農村部における中等学校でも、ヤクート語による教育が導入された。その時期84%あったソビエト全体の識字率から比較すると、ヤクート自治共和国における識字率は67.8%とやや低いものであったが、他地域と比べて著しく広大な農村部まで教育施設が行き届かなかったことや、教育施設を必要としない遊牧民族が多かったことは、逆に北方少数民族語が現在まで保持されている一因と言えよう。それ故に北方少数民族は1920年代まで文字を持っていなかった。ユカギール語にいたっては80年代にヤクーツクの言語研究所の協力の元、ヤクート語を基準にしたアルファベットが考案されるまで文字を持っておらず、古くから絵文字が用いられることが多かった<sup>11</sup>。北方少数民族言語は1930年代によりやうく体系的に分析され、ラテン文字での表記が試みられた。しかし「ソ連内諸民族の共通語がロシア語であることの便利さを考えて<sup>12</sup>」、またロシア語教育への利便性を考慮し、北方少数民族言語にもキリル文字が導入されることとなった。

1923年から主要民族言語であるヤクート語による、ソビエト政権公認の出版物が発刊され、翌年にはヤクート語による共産党紙《Хотугу ыччат(北の若者)》が発行された。また、1917年にはペトログラード大学の言語学者のC.A.ノヴゴロドフ<sup>13</sup>が、国際音声記号に基づいてラテン文字でヤクート語のアルファベットを整えた。1930年代までは段階的に切り替えていく予定だったが1930年代末に行われたヤクート語に関する言語会議において、キリル文字に7つの特殊な文字を加えた新しい正書法が定められた<sup>14</sup>。

ヤクート語の文章語の形成は四つの段階に分けられる。第一段階は1930年まで、先述のノヴゴロドフの活躍によって、ヤクート語の社会的機能が大きく拡充された時代を指す。1926年に定められたヤクート自治共和国言語法には「ヤクート語にロシア語と同じ国家語としての地位を与える」「ヤクート自治共和国の国家語はヤクート語とロシア語である<sup>15</sup>」と明記されており、国家語として共和国中に広く認知されることとなった。

第二段階は、1930年代である。ソ連内各地で民族語教育復興が図られたこの時代、多くの言語がキリル文字を中心とした文字と正書法を獲得した。ヤクート語をはじめとするチュルク系言語にも新しい規格の正書法が導入され、ある程度共通した文字が用いられることとなり、この正書法を元にした文法書、辞書、教科書や、文学作品も多く出版された。

1940年代から第二次世界大戦の時代をまたいだ1950年代までが第三段階であり、この時代にキリル文字による詳細な文法的・音声学的な基盤が定められた。これにより、ヤクート語は完全にキリル文字での表記に移行する道を歩むこととなった。そして80年代の終わりまでが第四段階とされ、多くのロシア語からの借用を含めた新しい言語的基盤が定められ、国家語としての機能を強めていくこととなった。実際に1970年代のソ連において、少数民族言語教育、またその言語による数学や理科などの科目は初等教育まででしか扱われておらず、中等・高等教育と学年が上がるにつれてロシア語にシフトしていく、また言語的基盤がないためロシア語にシフトせざるを得ない少数民族言語が多かった。そんな中ヤクート語はだいたい8年生まで多くの科目の教育で用いられていたことから、強い言語的基盤を持っていたと言えよう<sup>16</sup>。

しかしこのことが、ヤクート自治共和国内に居住する北方少数民族言語を圧迫したという問題も挙げられる。つまり北方少数民族言語教育が縮小された代わりに、ヤクート語での教育を受けざるを得ない状況が出来てしまったことが、国家語としてのヤクート語の言語地位を押し上げたのである。現在でもサハ共和国内の北方少数民族の多くがヤクート語を共通語のように話すことが出来るが、ある意味では「第一言語を犠牲にして支配的な言語を学ぶこと、すなわち引き算的な言語学習」というカンガスの指摘する言語抹殺の定義に当てはまる事態を招いてしまっていたのである<sup>17</sup>。

## II. 言語法の改正～新生ロシアの言語政策

ソ連の崩壊後、ロシア連邦内の共和国における言語法は次々に改正されていった。民族語に法的地位を付与することが目的であったが、言語法を改正、制定し、法的地位を付与したところで、実際の話者が居なければ言語としては消滅と同義である。実際に現在もロシア連邦内の少数民族言語のいくつかが消滅の危機にあり、『ロシアの諸民族言語のレッドブック』《Красная книга языков народов России<sup>18)</sup>》なるものまで出版されている。

言語法の改正、制定が上手く進まなかった地域の一つにダゲスタン共和国が挙げられ、ロシア連邦内においても、共和国独自の言語法の制定は1994年7月と一番遅かった。グルジア共和国やアゼルバイジャン共和国、チェチェン共和国と隣接する土地柄上、ロシア連邦内でも屈指の少数民族言語を抱える地域であり、最終的にダゲスタン共和国内の少数民族言語全て(その内いくつかは先述のレッドブックに掲載されている)を国家語として扱うことが明文化された<sup>19)</sup>。ユネスコによる国家語と公用語の定義によると、

「国家語とは国家の政治・社会・文化的な範囲において機能を果たしうる言語」

「公用語とは国家の行政、立法、司法において用いられる言語<sup>20)</sup>」

とされている。さらにロシア連邦の言語法の中では、「ロシア連邦の国家語」であるロシア語に関しての基準は定められているが<sup>21)</sup>、共和国内の国家語と公用語についての明確な基準は定められておらず、微妙な解釈や使用範囲の定義については、共和国ごとの裁量に任されている部分が大きいと言える。

ロシア連邦内におけるほぼ全ての地域で、依然としてロシア語がリンガフランカとして政治・経済・社会・文化活動に深く根付いており、法的地位が与えられたにもかかわらず、少しずつ機能を失い、消滅の危機に瀕している少数民族言語も少なくない。特に共和国名に民族名を冠さない少数民族言語の状態は芳しくなく、言語保存へ向けた新たなアプローチが必要であると言わざるを得ない。本章では、現在ロシア連邦内においても特殊かつ多様な言語環境を持つサハ共和国の言語状況をケーススタディとして取り上げる。ブルジュエフが「ある地域、居住地におけるロシア語と母語がどの様に機能しているか、ある言語の使用者が生活し働いている社会経済上の環境と、彼ら異民族の人達との歴史的、文化的、経済的関連、いくつかの言語が接触してそれぞれの言語がお互いに影響を及ぼし合っていること、また、大衆のコミュニケーションの手段であるとか、ある民族の代表者が異民族の言語に対してどの様な態度をとったかといったことやその他諸々の現象などは、ロシア語と民族語のバイリンガル発達を促す上での社会言語学的要素であると認められよう<sup>22)</sup>」と述べているように、サハ共和国における独自の言語法や歴史的背景を社会言語学的に考察することで、民族語をめぐる問題の本質をとらえ、その解決の糸口を探っていきたい。

### Ⅲ. サハ共和国における法的基盤、言語法

ではここで改めて、現在のサハ共和国における言語法と国家語・公用語に関する法的基盤を確認しておきたい。サハ共和国において、国家語の概念を含む言語法が登場したのは1926年のことであるが、公用語の概念が初めて登場したのはソ連崩壊後、1992年のことである。全5条40項からなる言語法「サハ共和国(ヤクーチヤ)における諸言語について<sup>23)</sup>」の中から、国家語と公用語に関係する条項の一部を抜粋したい。

第1条 第4項 「共和国に名称を与えた原住民の言語サハ語は、サハ共和国(ヤクーチヤ)の国家語である。サハ共和国(ヤクーチヤ)はサハ語に国家的援助を行い、サハ語の社会的・文化的な機能の拡大に務める」

第1条 第5項 「ロシア語はサハ共和国(ヤクーチヤ)の領土において国家語であり、民族間交流の手段として用いられる」

第1条 第6項 「エヴェンキ語、エヴェン語、ユカギール語<sup>24)</sup>、ドルガン語、チュクチ語は、公用語として認められており、同様に少数民族居住区域において国家語と同様に扱われる」<sup>25)</sup>

まず注目すべきは第1条第6項において、5つの少数民族言語が公用語として明記された点である。先述のダゲスタン共和国のような特殊な例を除けば、これだけの数の言語を公用語として挙げている共和国は新生ロシアにおいて極めて珍しい。なお、フィンランドの向かいに位置するカレリア共和国も多く、法的地位が与えられた言語を持つが、国家語はロシア語のみであり、少数民族言語に与えられた法的地位は公用語ではなく、あくまで民族語(национальные языки)である<sup>26)</sup>。2002年に言語法と共に改定されたロシア連邦憲法の中にも以下のような条文がある。

ロシア連邦憲法第68条 第1項 「いくつかの共和国では、現地の公用語の地位が定められている。例えばサハ共和国(ヤクーチヤ)言語法では、北方少数民族言語であるエヴェンキ語・エヴェン語・ユカギール語・チュクチ語が現地の公用語として認められており、国家語と同じ水準で使用することが定義づけられている<sup>27)</sup>。」

しかしサハ共和国の言語状況における基本的な問題として、少数民族の言語の機能の縮小、母国語学習のための環境の不足、そして言語の意義と役割への理解の不足が挙げられている。少数民族言語の現状は様に危機的であると評価されており、少数民族の社会的・経済的な指標として状況を示しうる。ユネスコは「消滅危機言語地図」において、サハ共和国の少数民族言語の状態を、エヴェンキ語、エヴェン語は「危険」、チュクチ語、ユカギール語は「重大な危険」の状態にあると評価した<sup>28)</sup>。

しかし、公用語の「国家の行政、立法、司法において用いられる言語<sup>29)</sup>」という定義を、サハ共和国の少数民族言語がそれだけの機能を果たせるかははなはだ疑問である。

## IV. サハ共和国の言語状況と諸問題

## 4-1. 国勢調査を中心とした現状の分析

ソ連が崩壊してから財政的な問題が原因で、2002 年まで国勢調査が行われず、少数民族言語の状態に関する明確なデータが存在しなかったが、2010 年新生ロシアにおける 2 回目の国勢調査が行われ、ようやく少数民族言語の実状が分かるようになってきた。2010 年度の国勢調査も一度は財政危機を理由に 2013 年に延期されると考えられていたが、10 億ルーブル以上の予算を割き、当時のプーチン首相の命令によって 2010 年秋に断行されることとなった<sup>30</sup>。この国勢調査の結果によると、サハ共和国内の総人口は 958,528 人であり、2002 年度の国勢調査の結果 949,280 人と比較すると微増傾向にあり、サハ共和国の出生率も、ロシア連邦全体の出生率と同様に、1998 年の経済危機に伴い大幅に減少した後、回復している傾向にある。ここでサハ共和国内における主要民族と少数民族の構成比を確認しておきたい。

表 1. サハ共和国における主要民族と少数民族の構成

(単位:人/総人口比)	1989 年	2002 年	2010 年
総人口	1,094,065	949,280	958,528
ヤクート人	365,236 (33.4%)	432,290 (45.5%)	466,492 (48.7%)
ロシア人	550,263 (50.3%)	390,671 (41.2%)	353,649 (36.9%)
エヴェンキ人	14,428 (1.3%)	18,232 (1.9%)	21,008 (2.2%)
エヴェン人	8,668 (0.8%)	11,657 (1.2%)	15,071 (1.6%)
ドルガン人	408 (0.03%)	1,272 (0.1%)	1,906 (0.2%)
ユカギール人	697 (0.06%)	1,097 (0.1%)	1,281 (0.1%)
チュクチ人	473 (0.04%)	602 (0.06%)	670 (0.07%)

出所：各年度の国勢調査の結果のホームページより筆者が作成<sup>31</sup>

1989 年の調査から 2002 年の間の大幅な人口減少は、主にソ連崩壊に伴う鉱工業地域からの人口の流出が原因だと考えられており、ロシア人の比率が大幅に減少していることから見て取れる<sup>32</sup>。一方ヤクート人やエヴェンキ人などのサハ共和国における先住民族の比率は増加傾向にある。2008 年度のロシア連邦全体での合計特殊出生率が 1.49 であるのに対し、サハ共和国では 1.92 という結果が出ている<sup>33</sup>。しかしながらヤクート人やその他の北方少数民族の人口自体の増加が多くないのは、若年層のサハ共和国外への流出が一因であるとも推測されている。

では、実際の言語状況はいかに変化しているのだろうか。多民族国家であるロシア連邦の国勢調査の調査票には、自分の民族や母語が何語であるか、また習得している言語を記入する欄があり、習得

している言語に関しては複数の言語を書き込めるようになっている。ここで、サハ共和国における主要民族と少数民族の言語習得状況を確認しておきたい。

表2 サハ共和国における主要民族と少数民族の言語習得状況(2002-2010)<sup>34</sup>

(単位：人) 2002 年度	ロシア語を習得	ヤクート語を習得	自分の民族語を 習得	人口
ヤクート人	376,439 (87.1%)	407,496 (94.3%)		432,290
ロシア人	389,557 (99.7%)	9,662 (2.5%)		390,671
エヴェンキ人	16,241 (89.1%)	15,428 (84.6%)	1,384 (7.6%)	18,232
エヴェン人	10,430 (89.5%)	9,302 (79.8%)	3,272 (28.1%)	11,657
ユカギール人	1,046 (95.4%)	630 (57.4%)	310 (28.3%)	1,097
ドルガン人	1,024 (80.5%)	1,217 (95.7%)	41 (3.2%)	1,272
チュクチ人	592 (98.3%)	データなし	データなし	602
2010 年度				
ヤクート人	416,780 (89.3%)	401,240 (86.1%)		466,492
ロシア人	353,335 (99.9%)	7,229 (2.0%)		353,649
エヴェンキ人	18,964 (90.3%)	16,874 (80.3%)	1,179 (5.6%)	21,008
エヴェン人	13,677 (90.8%)	11,503 (76.3%)	3,350 (22.2%)	15,071
ユカギール人	1,239 (96.7%)	634 (49.5%)	289 (22.6%)	1,281
ドルガン人	1,637 (85.9%)	1,775 (93.1%)	96 (5.0%)	1,906
チュクチ人	670 (100%)	69 (10.3%)	272 (40.6%)	670

出所：各年度の国勢調査の結果のホームページより筆者が作成<sup>35</sup>

基本的にどの民族も高い割合でロシア語話者が存在しているが、中でも2010年度の調査ではサハ共和国内のチュクチ人全員がロシア語を習得していると回答していることは注目すべき点である。その半面、ヤクート語習得者の割合は他の民族と比べて極めて少なく、民族語の習得率が高いことから、チュクチ人の多くは、ロシア語とチュクチ語のバイリンガル化が進んでいるということが言えるだろう。

また、ドルガン人におけるヤクート語習得者は、常にロシア語習得者数を上回っており、ドルガン語話者の居住区では、ほぼロシア語とヤクート語とのバイリンガル状態にあると言えるが、肝心のドルガン語習得者の割合が著しく低いことに注目せねばなるまい。そもそもドルガン語はヤクート語と同じチュルク系の言語であり、祖先も非常に近く、ドルガン語話者にとって習得は決して難しくな



いと思われるが、ドルガン語文語形成過程から続くヤクート人との接触と、それに伴う言語使用の範囲、機能の縮小などが原因で、サハ共和国内のドルガン語話者はここまで減少してしまったものと推測される<sup>36</sup>。しかし国勢調査の結果からも分かるように、ドルガン語習得者が8年で二倍以上に増加したことは極めて興味深い現象ではあるが、ドルガン人はサハ共和国外にも多数存在し、そこから入植してきた可能性も否定出来ない<sup>37</sup>。また、サハ共和国内で居住するチュクチ人の割合もロシア連邦全体から見ればごくごく少数であり、これから言語習得者の割合とともに大きく変動していく可能性がある<sup>38</sup>。

どの現地民族にもほぼ当てはまる傾向として挙げられるのは、人口は増加していながらも、ヤクート語ないし各民族語話者の割合は減少しており、その分ロシア語話者が増加しているということである。特にヤクート語に関して言及するならば、8年間で人口比約8%のヤクート語話者の減少という事態は極めて深刻である。その原因の一つは都市化にあるとされている<sup>39</sup>。サハ共和国内のヤクート人の約3分の2は農村部で生活しており、逆にロシア人の多くがサハ共和国都市部に居住している<sup>40</sup>。当然のことながら日常生活におけるロシア語使用の機会は増加し、同時にヤクート語の機能や使用機会は圧迫されることとなる。その他にも、ソ連崩壊後の市場経済の導入や、グローバル化の影響を受け、より良い生活を求める人々からのロシア語の需要も大きく高まった。ヤクート語はむしろ、ソ連時代の方が民族間交流を司る「国家語」としての機能を果たしていたが、現在はその機能がローカルでしか使えないヤクート語から、少しずつサハ共和国外でも十分に使用できるロシア語に移りつつあると言っても過言ではないだろう。

#### 4-2. 国勢調査と母語意識

2002年の国勢調査では設問されなかったが、1989年と2010年の国勢調査では、自分の母語が何語であるかが調査された<sup>41</sup>。結果ロシア連邦内の多くの民族が、自分の民族語を母語であると考えているにも関わらず、その数字と実際の話者の割合が一致しないということが明らかになった。サハ共和国内においてもそれは例外ではないことが、次の表で確認することが出来る。

表3 サハ共和国における主要民族と少数民族の母語意識

(単位:人)	ロシア語が母語	ヤクート語が母語	民族語が母語	有効回答数
ヤクート人	27,027 (5.8%)	438,664 (94.2%)		465,752
ロシア人	351,248 (99.5%)	1,308 (0.4%)		352,886
エヴェンキ人	2,536 (12.0%)	17,016 (81.2%)	1,346 (6.4%)	20,968
エヴェン人	2,003 (13.3%)	9,848 (65.4%)	3,089 (20.5%)	15,054
ユカギール人	563 (44.0%)	400 (31.3%)	306 (24.0%)	1,280
ドルガン人	59 (3.1%)	1,792 (94.1%)	53 (2.8%)	1,904
チュクチ人	333 (49.7%)	44 (6.6%)	287 (42.8%)	670

出所:「2010年全ロシア国勢調査」のホームページより筆者が作成<sup>42</sup>

ロシア人のロシア語への母語意識も含め、サハ共和国における民族語習得者の割合と、民族語を母語と考える人の割合はほぼ一致する、もしくはそれより一回り多いということが明らかになった。特にヤクート人のヤクート語への母語意識は実際の話者の割合と比較して極めて高いものであると推察される。ヤクート人に限らず様々な民族が母語やそれが持つ文化を再評価し始めていると言えよう。しかし山下は「何語を自分の母語と見なすのかは、多分に主観によって決められている」と述べており、この見解には再考の余地が残る<sup>43</sup>。

しかし、例外的にユカギール人の44%が、ロシア語が母語であると回答した点については少し言及しておかねばならない。サハ共和国外にも同民族がいるドルガン人やチュクチ人とは異なり、ユカギール人のほとんどがサハ共和国内に居住しているので、言語保存は現在のユカギール人の居住区域内でなされなければ、ユカギール語は消滅の道を歩んでしまうこととなる。さらにユカギール語はコリマ川によって話者の居住区域が2つに分散していることから接触が少なく、ソ連崩壊前後から方言化の傾向が著しい。昨今の研究ではコリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語を異なる言語として扱っているものも多い。そして若い世代の話者の減少に加え、その肝心の若い世代の話者の言語能力も「40歳以下の話し手は平均値で自分のユカギール語を『容易に理解するが、いくつかの定形表現を除けば話せない』という水準以下にあると自己評価している<sup>44</sup>」という状態にあること、ユカギール語による教科書と教員の不足など、ユカギール語保存に向けた課題は山積している。

ハリソンが「言語が外部の人間によって『救われる』ことはありえないということだ<sup>45</sup>」と指摘しているように、少数民族言語話者による言語保存に向けた内的な発露が欠如していれば、言語保存は成し得ないものである。言語というものは辞書や文法書にまとめ上げられれば保存出来るというものではなく、話者が存在し、話者の民族性や文化、知恵が介在してこそ言語であるからだ。「言語とは、民族にとって普遍的な意義である。全ての民族が自分の独自の文化、伝統、そして言語を保持する主権をもつ<sup>46</sup>」とはサハ共和国言語法の序文である。言語使用の機会・機能の低下は、その言語の持つ

文化や知恵に触れられる機会を減少させ、母語意識の欠如を招き、言語自体の消滅の一因となりうるのではなからうか。

#### 4-3. サハ共和国独自の言語政策とその背景、狙い

2011 年 10 月、サハ共和国では母語再評価の流れに呼応するかのように、共和国首長令により「2012 年から 2016 年のサハ共和国(ヤクーチヤ)における国家語と公用語の保存、研究と発達《Сохранение, изучение и развитие государственных и официальных языков в Республике Саха (Якутия) на 2012-2016 годы》<sup>47)</sup>という国家プログラム(以下プログラム)が批准された。プログラム責任主体は、サハ共和国(ヤクーチヤ)教育省であり、マスメディアや様々な省庁が協力機関として名を連ねている。

概要としてプログラム内では、サハ共和国内の国家語と公用語の機能の拡大を、保存・研究・発達の角度から援助すること、また言語保存を通してサハ共和国の社会・経済的発展、ひいては住民の生活の質の向上が目標であることが挙げられている。

なおこのプログラム中に記載されている「国家語」は、ロシア語も含有したものであり、プログラム達成の指標として、ヤクート語や公用語として掲げられた 5 つの北方少数民族言語だけでなく、ロシア語の話者の割合を上昇させることも明記されている。前節で取り上げたように、サハ共和国における国家語と公用語は、様々な組み合わせのバイリンガルないしマルチリンガルな状態にあり、少数民族の母語学習のための環境も複数言語を用いた状態で行われている。

福祉は「言語共同体と国家が同一の場合以外で、少数言語・地域語と、公用語が異なる社会集団と、同じ社会集団では平等ではない。なぜなら前者は母語の他に公用語を学ばなければならないが、後者は母語＝公用語であり、公用語を意図的に学ぶ必要がないからだ<sup>48)</sup>」という、言語政策における少数民族言語と国家語間の不平等状態を指摘しているが、先述の通りサハ共和国の場合、北方少数民族居住区域においてはロシア語ないしヤクート語と民族語のバイリンガルという状態が恒常的に維持されていること、言語法内で「同様に少数民族居住区域において国家語と同様に扱われる<sup>49)</sup>」と言語地位が保証されていることから、民族問題がプログラム実施に対して影響を与える可能性は極めて低いと考えられる。

無論、プログラム実施において全くリスクが存在しない訳ではなく、プログラム内では、現状に影響する肯定的な要因と否定的な要因、プログラム実施においての優先順位を明確化するという目的で、SWOT 分析が行われている。

表 4 プログラム実施状況の SWOT 分析

	強み (S)	弱み (W)
内的要因	言語政策実施のための法的基盤の存在	制定された法律があまり効率的に執行されていない
	サハ共和国(ヤクーチヤ)行政機関所属者や市民社会などを含め、幅広い層のプログラム支持者が居ること	プログラム実施への財源不足
	国家語と公用語を使用するマスメディアの存在	マスメディア関係者の言語能力の熟練度が不十分であること 北方少数民族言語を用いるマスメディアが存在しないこと
	プログラム実施の学術的・理論的な基盤の存在	学術的・理論的な研究成果が教育現場に導入されていないこと
	言語学分野の基礎研究、応用研究を行える教育機関、基礎研究の指導者の存在	サハ共和国内の北方少数民族言語が完全に研究しつくされていないこと 話し言葉、書き言葉、フォークロアの資料が完全に記録されていないこと 辞書・会話集・便覧的な参考文献の開発が不十分であること
	言語学分野での国家プログラムの実施経験があること	個々のプログラム運営のための財源の不足
	機会 (O)	脅威 (T)
外的要因	プログラムの実施	財源の不足
	サハ共和国(ヤクーチヤ)における国家語と公用語の習得度の向上	国家語の習得度の低下、北方少数民族言語の消滅の危機
	ヤクート語、北方少数民族言語によるマルチメディア的な基盤の創設	言語の記録・保存手段としてのマルチメディア的な基盤の不足 インターネット上での北方少数民族言語の低い認識度
	国家語の使用範囲の拡大	国家語と公用語の使用範囲の縮小

出所：「2012 年から 2016 年のサハ共和国（ヤクーチヤ）における国家語と公用語の保存、研究と発達」文書より筆者が作成<sup>50</sup>

この分析によって明らかとなったのは、実際の国家語と公用語の研究と発達の度合いと、プログラムが要求する度合いとの大きな隔たりである。仮にプログラムを効率よく運営出来たとしても、使用する言語を選ぶのは話者とその周囲の環境に委ねられるものである。その観点から言えば財源の確保を除く最優先の課題は、北方少数民族言語の機能と使用範囲の拡大であると言える。

2010 年の段階でサハ共和国内の 97%の普通教育施設(障害児のための普通教育施設を除く)において、ヤクート語の学習環境が整えられ、65.4%の児童がヤクート語を学習している。15 の学校ではエヴェン語、15 の学校ではエヴェンキ語、3 校でユカギール語、1 校でチュクチ語の教育が行われている。北方少数民族居住区域における普通教育施設の半分以上で少数民族言語教育の環境は整えられつつあり、一貫して増大の傾向にある。

1993 年度と 2009 年度の学年を比較すると、ヤクート語を言語科目として学ぶ児童・学生の割合は、

35.9%から 65.2%に、ヤクート語教育を行うことが出来る教育施設の割合も 69.9%から 96.5%に増大した<sup>51</sup>。教育施設だけに限らず、プログラムの目的として、教育用資料の拡充、近代化も盛り込まれており、それを使用する学習者・教育者数を増大させることが到達指標となっている。

プログラムは 2012 年～2014 年、2015 年～2016 年の二段階に分けて進められる予定である。現在施行中の第一段階では、サハ共和国における国家語と公用語の状況を改善するための諸事業の組織、国家語と公用語の機能を促進するためのシステムの形成を目標としており、サハ共和国の国家語と公用語による電子媒体の辞書、便覧、会話集の作成が実施されている。また、第二段階の期間(2015-2016)では、先述の辞書、会話集、文法書、便覧の内容確認と発行部数の決定、様々な種類の諸事業を継続させ、発展させることなどが盛り込まれている。

プログラムは以下の 3 つのサブプログラムから構成されており、その名称そのものがサブプログラム内で解決されるべき課題を表している。

- 1) サハ共和国(ヤクーチヤ)における国家語と公用語の役割の向上
- 2) サハ共和国(ヤクーチヤ)における国家語と公用語の総合研究と機能のモニタリング
- 3) サハ共和国(ヤクーチヤ)における国家語と公用語の発達のための近代技術の開発と導入

サブプログラム実施のために、サハ共和国(ヤクーチヤ)専門教育人材育成省、サハ共和国(ヤクーチヤ)文化精神発達省、サハ共和国(ヤクーチヤ)イノベーション政策・科学国家委員会、サハ共和国(ヤクーチヤ)出版放送局、サハ共和国(ヤクーチヤ)民族情勢局が参加している。プログラム責任主体であるサハ共和国(ヤクーチヤ)教育省は、プログラム実施の過程において、基本的な活動をコーディネートし、予算の効果的な執行と予定されている諸事業の調整を行うものとされている。

ここでサブプログラム毎の指標と現状、到達目標を確認しておきたい。

表5 サブプログラムとその指標、到達目標

プログラム名称	指標名称	単位	報告年度				到達目標	
			2008	2009	2010	2011	基本案	進展案
サブプログラム No.1 「サハ共和国 (ヤクーチヤ)にお ける国家語と公用 語の役割の向上」	サハ共和国(ヤク ーチヤ)人口のう ち、ロシア語を習 得している人の 割合 <sup>52</sup>	%	93	93	93	94	96	96
	サハ共和国(ヤク ーチヤ)の人口の うち、ヤクート語 を習得している 人の割合 <sup>53</sup>	%	47,05	47,5	47,5	47,5	49,5	49,5
	サハ共和国の人口 のうち、公用語 を習得している 人の割合 <sup>54</sup>	%	0,6	0,61	0,61	0,61	0,66	0,66
サブプログラム No.2 「サハ共和国(ヤ クーチヤ)にお ける国家語と公用語 の総合研究と機能 のモニタリング」	サハ共和国(ヤク ーチヤ)における 国家語と公用語 の保存・研究・発 達に関する現状 の諸問題の解決 に向けた学術的 出版物の量的拡大	-	0*	0	0	0	4倍	8倍
サブプログラム No.3 「サハ共和国(ヤ クーチヤ)にお ける国家語と公用語 の発達のための近代 技術の開発と導入」	サハ共和国(ヤク ーチヤ)の国家語 と公用語の習得 において近代的 な教育技術を使用 する人口の割合	%	0	0	0	0	43	44

\*データなし

出所：「2012年から2016年のサハ共和国（ヤクーチヤ）における国家語と公用語の保存、研究と発達」文書より筆者が作成<sup>55</sup>

ここでの基本案とは、最低限到達すべき目標であり、進展案を実施出来るかどうかは、プログラムの進捗と、確保できる財源量に依存する。基本案実現のために5年間で約6500万ルーブルがサハ共和国国家予算から割られることとなつてはいたものの、進展案実現のために理想とする1億ルーブルには程遠く、プログラム実施以前から財源不足という問題が浮上していた<sup>56</sup>。2013年度のサハ共和国における国家予算に関する報告書においても、当プログラムに關係する財源は、基本案実施のためには十分に確保されてはいるが、進展案実施のためにはやや不足しているというデータが出ていた<sup>57</sup>。

3つのサブプログラム「国家語と公用語の役割の向上」「国家語と公用語の総合研究と機能のモニ

タリング」「国家語と公用語の発達のための近代技術の開発と導入」それぞれが明確な役割を持っており、「保存・研究・発達」の三方向から国家語・公用語使用の環境を整えるためのプログラムであることが見て取れる。しかし、到達目標や言語法における規定からも分かるように、国家語と公用語は決して同じレベルのものとして扱われておらず、国家語は研究と発達、公用語は保存と研究の方に比重が置かれている。

中でも多くの予算を割かれているのが、サブプログラム No.3「国家語と公用語の発達のための近代技術の開発と導入」である。このサブプログラムの目的は、サハ共和国の国家語と公用語の教育において、近代的で効果的な技術を導入することにある。現在、諸言語の保存・研究・発達のために、話し言葉・書き言葉両方を記録するために IT 機器の積極的な導入が検討されている。現段階で国際文字コードの Unicode に登録されているサハ共和国の民族言語は、ロシア語を除けばヤクート語のみであり、さらに OS レベルで使用できる言語はロシア語しかない。諸民族語による統一されたキー配列のキーボード、フォント、諸民族語教育のためのオンラインリソースなどの開発は危急の課題であるとし、サハ共和国教育省はマイクロソフト社や Linux 開発集団との相互協力を打診している。

近年はヤクート語によるウェブサイトの数も増加してきたが、現実問題ヤクート語でさえも文字コードがきちんと統一されておらず、しばしばインターネット上では、文字化けを避けるための対策として、ロシア語の文字コードを使用しながら、ヤクート語特有の文字のみをラテン文字や数字で代用したテキストを目にする。散見されるパターンとして、有声軟口蓋摩擦音の **ɣ**, 円唇前舌半狭母音の **ɵ** はそれぞれ数字の 5, 8 で、無声声門摩擦音 **h** や円唇前舌狭母音 **ɣ** はそれぞれラテン文字の **h**, 大文字の **Y** で代用される。しかし軟口蓋鼻音 **ɲ** だけは代用できる適切な文字がないため、キリル文字の **h** のままで書かれることが多く、学習者の混乱を招きかねない。

とあらば、国家的な事業としてサハ共和国における国家語ないし公用語の正書法の改訂を検討することも、問題解決に向けた一つの手段であるのではなかろうか。山下は「サハの言語学者には、スターリン時代の 1938 年に制定された現在のアルファベットを改訂して、新たな正書法を確立したいと考えている人が多い<sup>58)</sup>」と述べており、さらに他の民族言語の正書法もソ連時代にヤクート語の文字を基準に定められていることから(民族語ごとにいくつか固有の文字も定められているが)、統一した規格の正書法に改訂することは十分に可能であると推測される。

ハリソンは消滅の危機にある言語を救う道として以下の 8 つの戦略例を提示している<sup>59)</sup>。

①秘密を保持し、公開せず、制限を加える ②公開し、紹介し、自由に与える ③口承の伝統を守り、話し言葉のみにする ④文字にして書き残す ⑤盛りたて、宣伝し、誇りを示す ⑥新語を補充し、活気を与える ⑦新たなテクノロジーを採り入れる ⑧記録に残す

サハ共和国の国家プログラムに当てはめることが出来るとすれば、⑤、⑦、⑧が妥当であろう。⑤に関して言えば、「前向きな姿勢で取り組むことこそ、言語を生き延びさせる唯一、最大の力だ<sup>60)</sup>」と言われるように、少数民族言語を時代遅れですでに廃れ、退化したものだと思えるような環境は決

して作ってはならない。かつて存在した「ソ連社会の中では伝統的なしきたりや行事が遅れた文化として否定される傾向<sup>61</sup>」が、どれだけ多くの民族の文化や伝統を失わせたか、サハ共和国の人々は身に染みて理解していることだろう。

サハ共和国の人々にとっての正月と言われる夏至祭の最後に、オフオハイと呼ばれる円舞が行われる。集まった人たちが手をつなぎ、音頭を取る歌い手が、即興で作った歌(基本的にヤクート語で歌われることが多い)を、全員で合唱しながら踊り続けるというものであるが、ペレストロイカ政策が行われるまで、オフオハイも公に踊ることは否定される風潮が強かった<sup>62</sup>。しかしそのオフオハイが2011年、2012年と世界最大の人数で行われた円舞としてギネス記録を打ち立てている<sup>63</sup>。また2005年には、ヤクート族の英雄叙事詩「オロンホ」がユネスコの「人類の口承及び無形遺産に関する傑作の宣言<sup>64</sup>」に登録されたことなどを踏まえると、少なくともヤクート語においては言語保存、機能の拡大に向けて、着実な一歩を歩みだしていると言えよう。

⑦新たなテクノロジーを採り入れるということに関しては、以前述べた通り、国家プログラム内でもきちんとアプローチ方法が提示されているが、やはりソフトウェアやプログラムの開発に期待することも必要でありながら、少数民族言語の方からもIT機器に適合するように歩み寄ることが肝要であると提案したい。さらにもう1つ付け加えるとすれば、主にIT機器を積極的に使用する世代、つまり若い世代へのIT機器を通したアプローチ手法の明文化を検討すべきである。そうすると⑧記録に残すというプロセスも大いに簡略化がなされるのでないかと考える。

#### 4-4. 言語政策の実績、動向

さて、サハ共和国内でプログラムが実施されはじめてから約2年になるが、実際にどのような事業が行われているのだろうか。

初年度である2012年において最初に行われた行事は「サハ共和国(ヤクーチヤ)母語と文字の日」である。1996年、サハ共和国初代大統領ニコラエフ(Михаил Ефимович Николаев)<sup>65</sup>の時代に、最初のヤクート語の教科書の著者C.A.ノヴゴロドフ(注13を参照)の誕生日である2月13日が「サハ共和国(ヤクーチヤ)母語と文字の日」として定められた。2012年はノヴゴロドフ生誕120周年ということもあり、盛大にイベントが催された<sup>66</sup>。サハ共和国国立オペラ・バレエ劇場では祝賀パーティ「母語：多様性の中の結束」が行われ、ヤクート語をはじめ北方少数民族言語の発展に貢献した人が表彰を受けた<sup>67</sup>。また、この日から約10日間を「サハ共和国(ヤクーチヤ)の母国語の10日間」とし、様々なイベントが催されている。特に国家プログラムを反映した行事として注目されたのが、サハ共和国ローカルのテレビ局であるHBRがこの10日間、北方少数民族言語による11のラジオ番組、8のテレビ番組を放送したことである。

この年はサハ共和国内の多くの新聞や雑誌において、国家プログラムやそれに伴う諸事業について



の記事が掲載された。マスメディアにおける国家語と公用語の機能のモニタリングも既に開始されており、主にヤクート語の新聞である《Саха сирэ (サハの地)》と、《Ил тумэн (国会)<sup>68</sup>》の記事中のヤクート語における記述、文法の正確さやロシア語からの借用語などを分析し、文法ミスの類型化や相互のテキストの比較を行うことにより、ヤクート語における文法の問題を明確にするという試みがなされている。

北東連邦大学(旧ヤクーツク国立大学)でもサハ共和国内の言語政策、諸言語の発達に関する論文が多く執筆されたこともあり、プログラムに対して若い世代の関心も高いと推測される<sup>69</sup>。

2013 年はサハ共和国における民族語に対して大きな変化の一年となった。上半期だけで北方少数民族言語による 32 本もの論文が執筆され、母語学習者のための辞書が 7 冊、約 30 種類の補助的教科書が出版された。また、サハ共和国(ヤクーチヤ)民族情勢局の主催で、エヴェン語、エヴェンキ語、ユカギール語の学習を希望する人のための休日学校も行われている。

さらに、政府の指示でヤクート語の正書法や句読法の統一に向けた委員会が設立され、標準発音法辞書に補足と改訂がなされる予定である。それを受けて 2013 年 2 月、「『サハ共和国(ヤクーチヤ)の言語について』の改正」という首長命令の元、サハ共和国(ヤクーチヤ)民族情勢局を中心に、言語法の改訂が検討され始めた。1992 年に制定されてから 3 度目の改訂になり、最後の改訂は 2002 年であったことから、実に 10 年以上改訂されていなかったことになる。12 月には北東連邦大学言語研究所、教育機関の研究者や行政当局の代表者などが臨席した公開議論が行われ、最終改正草案が決定された<sup>70</sup>。以下は変更されうる条文の抜粋である。

第 1 項 第 4 条に以下の条文を追加する。「サハ共和国(ヤクーチヤ)の国家語としての現代標準ヤクート語の正書法、句読法、文法用語は、サハ共和国(ヤクーチヤ)政府によって承認される」

第 1 項 第 27 条に以下の条文を追加する。「母国語による初等義務教育、中等義務教育を受けた生徒は、サハ共和国(ヤクーチヤ)の行政機関で所定の手続きを踏むことによって、卒業時に受験する国家試験における母国語と文学の科目において、母国語を選択する権利を有する」

第 1 項 第 36 条を以下のように変更する。「サハ共和国(ヤクーチヤ)で製造された商品のラベル、商標、説明書、レッテルは、ロシア語に加え、製造業者の裁量で、ヤクート語と(あるいは)現地の公用語で記載される」

第 4 条に対する追加は、先述の通りヤクート語の正書法や句読法を国家的支援の元に統一するという目的を遂行するためのものである。「ヤクート語の正書法について審議する委員会が、サハ共和国政府によって設立されていない<sup>71</sup>」ことはサハ共和国の言語学者によって指摘されていたが、この条文の追加と委員会の設立は、ヤクート語の言語学的基盤を固めていく上で大きな一歩となりうる。

第 27 条に加えられる「国家試験」が指しているのは明らかに統一国家試験(ЕГЭ<sup>72</sup>)のことであり、既に 2012 年の段階で実験的に取り入れられ、92 人の卒業予定者がヤクート語、ヤクート語文学の科目を選択し受験した<sup>73</sup>。ただしまだ実験的な段階であり、ロシア語の受験は必須であるが、これから

段階的にヤクート語を必須受験科目にシフトさせていくものと推測される。

また、第36条における変更箇所とは、「ヤクート語と(あるいは)現地の公用語で」の部分である。改定前は「ヤクート語とロシア語で、必要に応じて現地の公用語で」という文面であった。「必要に応じて」とは名ばかりで、公用語はおろか、ヤクート語で記載されたラベルすら目にする機会はほとんどなかったが、商品の製造現場などで遵守されれば、国家語と公用語の機能の拡大に寄与するものとなると思われる。これらの条文追加や変更から見えて来ることは、今回の法改正は明らかに国家プログラム、中でも最重要の課題である、国家語と公用語の機能の拡大を意識したものである、ということである。無論ソ連時代におけるロシア語の押し付けにより、言語機能の縮小と消滅の危機という事態を目の当たりにしていた分、言語法改正やプログラムの実施にはかなり慎重にならざるを得ないというのが、新生ロシアにおける言語政策に対する通説である。SWOT分析でも挙げられていたように、言語機能の拡大と縮小は対の存在であり、それが外的要因という判断、つまりプログラムで統制できない範囲という判断は概ね正しい。いずれにしてもこのプログラムを通して、サハ共和国内の言語状況がいかに変化していくかを注視していきたい。

## 終章

以上、サハ共和国をケーススタディとし、社会言語学的な観点からソ連崩壊後の新生ロシアにおけるロシア語と民族語をめぐる諸問題の解決へのアプローチを考察してみた。現実問題、サハ共和国の民族言語の社会言語学的研究はあまりなされておらず、政策も言語保存を優先させたものが多いが、政策を通して分析することで、実際の言語状況、言語を取り巻く環境を確認することが出来た。それを踏まえた上で、以下に筆者が提案出来る、民族語をめぐる問題解決へのアプローチを挙げたい。

第一に、少数民族言語の言語地位と定義、使用範囲を明確にすることである。サハ共和国の事例からも明らかになったように、公用語という言語地位を付与しても、言語の機能の及ぶ範囲を明文化せずにいると、言語選択は話者の自主性のみに委ねられ、少数民族語話者はより使用範囲の広い言語を選択することとなる。しかし、サハ共和国において少数民族言語話者の居住区域は局所的である場合が多く、限定的に少数民族言語が高い機能を持てる環境の創設はそう難しくないと思われる。

第二に、少数民族言語における共通の正書法を制定することを挙げたい。少数民族語ごとに特殊な文字を持っているという現状では、応急処置的にIT機器に適合しない文字を、既存のものを用いて適合させることで、迅速に機能の拡大を図ることも可能であり、何より言語保存の主体となりうる若い話者と、少数民族言語の距離をより近づけることが出来るだろう。無論最終目標としてはIV.4-3で述べたように、少数民族言語ごとに固有の文字、表記をunicodeに登録し、IT機器の方に適合させていくことが望ましい。

残った疑問の一つに、ヤクート語や北方少数民族言語を何語で教えるのか、何語による説明が記載

された教科書や便覧を出版するのにかについてもプログラム内には明記されていなかったという点がある。教科書製作や研究の利便性から考えて、往々にしてロシア語であろうということが推測されるが、ウクライナ語話者がロシア語をほとんど理解できるように、語族や語派に近い言語を通して学習する方が効率的なケースが多い。この場合インド・ヨーロッパ語族に属するロシア語より、同じ膠着語であり母音調和を持つヤクート語の方が他の少数民族言語学習への利便性は高い。無論少数民族言語そのものを使って学習が出来れば一番効率的ではあるが、不足する語彙をロシア語からではなく、近似の言語の単語から借用することで学習者の負担も軽減することが考えられる。カンガスの定義によれば、「第一言語に加えて新たな言語を学ぶ足し算的な言語学習<sup>74</sup>」こそが、言語多様性を持続させるために必要であるとされており、その意味では学習者の負担の軽減は必須の課題である。

しかし今後の課題としては、ロシア語と民族語の実生活における運用レベルを確認することが挙げられる。今回取り上げたプログラムにおいてもその点が明記されておらず、プログラムが要求する言語運用レベルによっては、プログラムを少数民族言語ごとに細分化させる必要があるのではなかろうか、と考える。

また、サハ共和国と同様の民族語の問題は、ロシア連邦内の他の連邦構成主体でも発生していると考えられ、本論での考察が他の事例においても応用できるかどうかという点も、今後検討、確認していきたい。

注

- <sup>1</sup> K.デイヴィッド・ハリソン 『亡びゆく言語を話す最後の人々』、99頁。
- <sup>2</sup> 便宜上以下通称の「ロシア共和国」で統一する。
- <sup>3</sup> 正式名称は Республика Саха(Якутия)であるが、便宜上以下「サハ共和国」で統一する。また、表記に揺れのある同義語、サハ人/ヤクート人、サハ語/ヤクート語はロシア語の якут, якутский を基準に全てヤクートで統一する。ただし引用はこの限りでない。なお、藤代も「日本語では、サハ語、ヤクート語共に使用されており、それぞれに特に付加的な意味はない」と述べている。藤代節「北東アジアのチュルク諸語研究—日本からそそぐ北東アジアへの眼差し—」、76頁。
- <sup>4</sup> 便宜上以下通称の「ヤクート自治共和国」で統一する。
- <sup>5</sup> NHK取材班他『NHK 大型ドキュメンタリー北極圏 3』、135頁。なお、ヤクート人の祖や、ヤクート語の発生については諸説ある。
- <sup>6</sup> エヴェン人、エヴェン語に関しても、民族語による呼称ラムート(ламут)とロシア語による呼称とのゆれがあるが、ヤクート語と同様に一般的なロシア語の эвен, эвенский の表記に合わせて本論ではエヴェン、エヴェン語で統一した。
- <sup>7</sup> 「チュルク諸語の多くがトルコ語同様6つの格を有するのに対し、ヤクート語には8つの格が認められる」江畑冬生「「属格の痕跡」とされるヤクート語の形式について」、77頁。
- <sup>8</sup> NHK取材班他『NHK 大型ドキュメンタリー北極圏 3』144頁。
- <sup>9</sup> А.П. Притворов, Якутия: Историко-культурный атлас. стр. 360.
- <sup>10</sup> 本論ではロシア語の коренные малочисленные народы севера を北方少数民族と翻訳し統一した。
- <sup>11</sup> NHK取材班他『NHK 大型ドキュメンタリー北極圏 3』16頁。
- <sup>12</sup> 同上、164頁。
- <sup>13</sup> Семён Андреевич Новгородов (1892-1924) サハ共和国出身の言語学者。1916年に「ロシア語・ヤクート語簡易辞典」を出版、1920年代にはラテン文字によるヤクート語の正書法を確立させた。А.П. Притворов, Якутия: Историко-культурный атлас. стр.312.
- <sup>14</sup> 山下宗久、「サハ(ヤクート)語の現状と課題」30頁。
- <sup>15</sup> В.А. Попов, Государственные Языки в Российской Федерации, стр.294.
- <sup>16</sup> 8年生以上で使われていたのは、ロシア語をはじめタタールやバシキールなど、いわゆる大民族の言語だけである。塩川伸明「ソ連言語政策史再考」180-181頁。
- <sup>17</sup> トーヴェ・スクトナブ＝カンガス(木村護郎編訳)「言語権の現在 言語抹殺に抗して」、298頁。
- <sup>18</sup> Владимир Петрович Нерознак, Красная книга языков народов России: Энцикл. словарь-справочник, Ред. изд. фирма Academia, 1994.
- <sup>19</sup> 「ダゲスタン共和国の国家語は、ロシア語とダゲスタンの諸民族言語である」В.А. Попов, Государственные Языки в Российской Федерации. стр.136.
- <sup>20</sup> В.А. Попов, Государственные Языки в Российской Федерации, стр.11.
- <sup>21</sup> 「ロシア連邦の国家語は、統一した多民族国家であるロシア連邦の民族間関係の強化、相互理解を促進する言語である」Там же. стр.308.
- <sup>22</sup> Г.Г.ブルジュёнов 「ロシア語学習の社会言語学的諸相」、115頁。
- <sup>23</sup> 《О языках в Республике Саха(Якутия)》 В.А. Попов, Государственные Языки в Российской Федерации, стр.368.
- <sup>24</sup> 厳密には現在のユカギール語は、コリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語の二つに分化しており、話者居住区域もそれぞれ異なる。
- <sup>25</sup> 《О языках в Республике Саха(Якутия)》 В.А. Попов, Государственные Языки в Российской Федерации, стр.368.
- <sup>26</sup> Там же, стр.99.
- <sup>27</sup> Конституция РФ, Статья 68 [<http://az-libr.ru/index.htm?Law&Constn/ru/KRF93/krf068>] (2013年5月閲覧)。なお、ドルガン語はこの原文に含まれていない。
- <sup>28</sup> UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger, “UNESCO Interactive Atlas of the World's Languages in Danger” [<http://www.unesco.org/culture/languages-atlas/index.php>] (2013年2月閲覧)。
- <sup>29</sup> В.А. Попов, Государственные Языки в Российской Федерации, стр.11.
- <sup>30</sup> 《Путин решил не переносить перепись россиян из-за кризиса и даст на это 10 миллиардов》, Newsru.com, 30.10.2009, [<http://www.newsru.com/arch/russia/30oct2009/perepis.html>] (2013年1月閲覧)
- <sup>31</sup> 以下のウェブサイトより筆者が作成。  
Демоскоп weekly, “Всероссийная перепись населения 1989 года. Национальный состав населения по регионам России” [[http://demoscope.ru/weekly/ssp/rus\\_nac\\_89.php?reg=74](http://demoscope.ru/weekly/ssp/rus_nac_89.php?reg=74)] (2012年12月閲覧)。  
всероссийская перепись населения 2002 года, “Том 4. Национальный состав и владение языками,

- гражданство” [www.perepis2002.ru/index.html?id=17] (2012 年 12 月閲覧).
- всероссийская перепись населения 2010 года, “Том 4. Национальный состав и владение языками, гражданство” [http://www.gks.ru/free\_doc/new\_site/perepis2010/croc/perepis\_itogi1612.htm] (2012 年 11 月閲覧).
- <sup>32</sup> 山下宗久「サハ(ヤクート)語の現状と課題」32-39 頁。
- <sup>33</sup> statinfo.biz, “Коэффициент суммарный рождаемости”, [http://statinfo.biz/Data.aspx?lang=1&act=1889] (2013 年 1 月閲覧).
- <sup>34</sup> 複数回答が可能なので、話者の合計は人口に一致しない。
- <sup>35</sup> 以下のウェブサイトより筆者が作成。
- всероссийская перепись населения 2002 года, “Том 4. Национальный состав и владение языками, гражданство” [www.perepis2002.ru/index.html?id=17] (2012 年 12 月閲覧).
- всероссийская перепись населения 2010 года, “Том 4. Национальный состав и владение языками, гражданство” [http://www.gks.ru/free\_doc/new\_site/perepis2010/croc/perepis\_itogi1612.htm] (2012 年 11 月閲覧).
- <sup>36</sup> 藤代節「北東アジアのチュルク諸語研究—日本からそそぐ北東アジアへの眼差し—」76-77 頁。
- <sup>37</sup> Всероссийская перепись населения 2010 года, “Том 4. Национальный состав населения” [http://www.gks.ru/free\_doc/new\_site/perepis2010/croc/Documents/Vol4/pub-04-01.xlsx] (2013 年 12 月閲覧).
- <sup>38</sup> Социально-демографический портрет России - По итогам Всероссийской переписи населения 2010 года. стр.103-104.
- <sup>39</sup> aartyk.ru «Число людей, говорящих на родном языке, в республике сокращается» [http://www.aartyk.ru/cultura/item/739-chislo-lyudey-govoryaschih-na-rodnom-yazyke-v-respublike-sokrasch-aetsya] (2013 年 9 月閲覧)
- <sup>40</sup> Всероссийская перепись населения 2010 года, “Том 4. Национальный состав населения”.
- <sup>41</sup> Социально-демографический портрет России - По итогам Всероссийской переписи населения 2010 года. стр.79-80.
- <sup>42</sup> 以下のウェブサイトより筆者が作成。
- Всероссийская перепись населения 2010 года, “Том 4. Население наиболее многочисленных национальностей по родному языку” [http://www.gks.ru/free\_doc/new\_site/perepis2010/croc/Documents/Vol4/pub-04-08.xlsx], “Население коренных малочисленных народов Российской Федерации по родному языку по отдельным субъектам Российской Федерации” [http://www.gks.ru/free\_doc/new\_site/perepis2010/croc/Documents/Vol4/pub-04-23.rar] (2012 年 11 月閲覧).
- <sup>43</sup> 山下宗久「サハ(ヤクート)語の現状と課題」27 頁。
- <sup>44</sup> 遠藤史「ユカギール語の過去・現在・未来」16 頁。
- <sup>45</sup> К.Дейヴィдд・ハリソン『亡びゆく言語を話す最後の人々』321 頁。
- <sup>46</sup> В.А. Попов, Государственные Языки в Российской Федерации. стр.368.
- <sup>47</sup> Министерство образования Республика Саха(Якутия) «Государственная программа Республики Саха (Якутия) «Сохранение, изучение и развитие государственных и официальных языков в Республике Саха (Якутия) на 2012-2016 годы»» [http://sakha.gov.ru/node/53937] (2013 年 9 月閲覧)
- <sup>48</sup> 福地俊夫「言語権に関する理論的考察」(2013 年 7 月閲覧)。なお、引用箇所における「公用語」の概念は、本論における「国家語」と同義である。
- <sup>49</sup> «О языках в Республике Саха(Якутия)» В.А. Попов, Государственные Языки в Российской Федерации, стр.368.
- <sup>50</sup> Министерство образования Республика Саха(Якутия) «Государственная программа Республики Саха (Якутия) «Сохранение, изучение и развитие государственных и официальных языков в Республике Саха (Якутия) на 2012-2016 годы»» [http://sakha.gov.ru/node/53937] (2013 年 9 月閲覧)
- <sup>51</sup> aartyk.ru «Число людей, говорящих на родном языке, в республике сокращается» [http://www.aartyk.ru/cultura/item/739-chislo-lyudey-govoryaschih-na-rodnom-yazyke-v-respublike-sokrasch-aetsya]
- <sup>52</sup> サハ共和国内のロシア語話者数をサハ共和国総人口で割った数
- <sup>53</sup> サハ共和国内のヤクート語話者数をサハ共和国総人口で割った数
- <sup>54</sup> サハ共和国内の北方少数民族言語話者数の総和をサハ共和国総人口で割った数
- <sup>55</sup> Министерство образования Республика Саха(Якутия) «Государственная программа Республики Саха (Якутия) «Сохранение, изучение и развитие государственных и официальных языков в Республике Саха (Якутия) на 2012-2016 годы»» [http://sakha.gov.ru/node/53937] (2013 年 9 月閲覧)
- <sup>56</sup> Официальный информационный портал Республики Саха (Якутия), “Решения Президента Республики Саха (Якутия)”, [http://sakha.gov.ru/node/16000] (2012 年 11 月閲覧).

- <sup>57</sup> Государственный бюджет Республики Саха (Якутия) на 2013 год, «<http://iltumen.ru/node/6004>». (2013年9月閲覧).
- <sup>58</sup> 山下宗久「サハ(ヤクート)語の現状と課題」30頁。
- <sup>59</sup> K.デイヴィッド・ハリソン『亡びゆく言語を話す最後の人々』321-328頁。
- <sup>60</sup> 同上、324頁。
- <sup>61</sup> NHK取材班他『NHK大型ドキュメンタリー北極圏 3』126頁。
- <sup>62</sup> 同上、123頁。
- <sup>63</sup> SakhaNews. “Якутия снова в книге рекордов Гиннеса” [<http://1sn.ru/60686.html>] (2013年12月閲覧)
- <sup>64</sup> 『ユネスコ「人類の口承及び無形遺産に関する傑作の宣言」」  
[[www.bunka.go.jp/bunkashingikai/hogojouyaku/01/pdf/sankou\\_3.pdf](http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/hogojouyaku/01/pdf/sankou_3.pdf)] (2013年12月閲覧)
- <sup>65</sup> The voice of Russia 「ロシア 国内共和国の首長の名称に「大統領」を禁止」  
[<http://japanese.ruvr.ru/2010/12/29/38201007.html>] (2013年6月閲覧)。このため2010年に首長に就任したボリス・ソフ(現職)に限り、大統領とは記載しない。
- <sup>66</sup> Ассоциация коренных малочисленных народов Севера, Сибири и Дальнего Востока Российской Федерации, “В Якутии отмечается День родного языка и письменности”,  
[<http://www.raipon.info/2654.html>] (2013年2月閲覧)。
- <sup>67</sup> エヴェン語による詩人ワシーリー・レベジェフ、エヴェンキ語研究の第一人者グラフィナ・マカレヴナ、ユカギール語文学創設者ニコライ・スピリドノフなどの名前を冠した賞が贈られる。
- <sup>68</sup> 山下宗久「サハ(ヤクート)語の現状と課題」の翻訳を参考にした。
- <sup>69</sup> Совет по языковой политике при Президенте Республики Саха (Якутия)“О деятельности Совета по языковой политике при Президенте Республики Саха (Якутия) за 2011-2013 годы”[<http://sakha.gov.ru/node/123225>]
- <sup>70</sup> Департамент по делам народов Республики Саха(Якутия)“Итоговые документы общественного обсуждения законопроекта «О языках в Республике Саха (Якутия)»”[<http://sakha.gov.ru/en/node/144459>]
- <sup>71</sup> 山下宗久「サハ(ヤクート)語の現状と課題」30頁。
- <sup>72</sup> 統一国家試験。中等教育機関の卒業試験と大学入学試験を兼ねており、多くの教育機関で用いられている。必修のロシア語と数学に加え、外国語(英語やドイツ語)、文学や理系科目をいくつか選択して受験する。Официальный информационный портал Единого государственного экзамена“Основные сведения о ЕГЭ”[[http://www.ege.edu.ru/ru/main/main\\_item/](http://www.ege.edu.ru/ru/main/main_item/)] (2014年1月閲覧)
- <sup>73</sup> Interfax - Russia.ru “В Якутии впервые пройдет ЕГЭ по якутскому языку и литературе”  
[<http://interfax-russia.ru/FarEast/main.asp?id=317605>] (2014年1月閲覧)
- <sup>74</sup> トーヴェ・スクトナブ＝カンガス(木村護郎編訳)「言語権の現在 言語抹殺に抗して」298頁。

## 参考文献

### ●日本語

池田元博『ブーチン』、新潮新書、2004年。

江畑冬生「「属格の痕跡」とされるヤクート語の形式について」『チュルク諸語研究のスコープ』、大阪大学世界言語研究センター「地政学的研究」プロジェクト、溪水社、2012年。

NHK取材班他『NHK大型ドキュメンタリー北極圏 2』、日本放送出版協会、1989年。

NHK取材班他『NHK大型ドキュメンタリー北極圏 3』、日本放送出版協会、1989年。

エリザベス・ロバーツ(おびただす編訳)『ゴルバチョフはどんな改革をめざしたか ソ連邦略史から見たペレストロイカ』、ほるぷ出版、1991年。

遠藤史「ユカギール語の過去・現在・未来」『Arctic Circle』20号、北方民族博物館友の会、1996年。

トーヴェ・スクトナブ＝カンガス(木村護郎編訳)「言語権の現在 言語抹殺に抗して」、三浦信孝、糟谷啓介編『言語帝国主義とは何か』、293-314頁、藤原書店、2000年。

塩川伸明「ソ連言語政策史再考」『スラブ研究』46号、北海道大学スラブ研究センター、1999年。

И.В. スターリン(スターリン全集刊行会訳)『スターリン全集 第二巻』、大月書店、1980年。

田中克彦『「スターリン言語学」精読』、岩波書店、2000年。

- 田中克彦『言語からみた民族と国家』、岩波書店、1991年。
- 田中克彦『チョムスキー』、岩波書店、1990年。
- 高木八尺、末延三次、宮沢俊義編『人権宣言集』、岩波文庫、1988年。
- 土岐康子「言語法の改正」『外国の立法：立法情報・翻訳・解説 (216)』、国立国会図書館、2003年。
- ボフダン・ナハイロ、ヴィクトル・スヴォボダ(高尾千津子、土屋礼子訳)『ソ連邦民族・言語問題の全史』、明石書店、1992年。
- ミハエル・ニコラエフ(佐藤哲雄訳)『新生サハ(ヤクート)共和国 自由と人間の選択』、創元社出版、1994年。
- K.デイヴィッド・ハリソン(川島満重子訳)『亡びゆく言語を話す最後の人々』、原書房、2013年。
- 兵頭慎治「連邦システムから見た将来のロシアの国家像」『防衛研究所紀要』第3巻第1号、防衛研究所、2000年。
- 福地俊夫「言語権に関する理論的考察」[<http://www.asahi-net.or.jp/~yh8t-fkc/shuron.html>]、1999年。
- 福田誠治「ソビエト、ロシアにおける民族と言語問題(2) 一 共産党の民族理論の原型(2)」『都留文科大学研究紀要』第52集、都留文科大学、2000年。
- 藤代節「北東アジアのチュルク諸語研究—日本からそそぐ北東アジアへの眼差し—」『北東アジア研究』別冊第1号、島根県立大学北東アジア地域研究センター、2008年。
- Г.Г.ブルжунوف「ロシア語学習の社会言語学的諸相」『香川大学一般教育研究』36巻、香川大学一般教育部、1989年。
- 松本亮「エヴェンキ語、ヤクート語及びブリヤート語における人称接辞を伴う副動詞形について」『京都大学言語学研究』24号、京都大学文学部言語学研究室、2005年。
- 丸山圭一『民族自決権の意義と限界』、有信堂高文社、2003年。
- 南謙吾「ソ連崩壊後の新生ロシアにおけるロシア語と民族語をめぐる諸問題(1)—サハ共和国の言語状況と言語政策」『創価大学ロシア・スラヴ論集』第6号、創価大学ロシア・スラヴ学会、2013年。
- 山下宗久「サハ(ヤクート)語の現状と課題」『千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第15集『ユーラシア少数言語文化の現状と課題』』、千葉大学大学院人文社会科学部研究科、1999年。
- 山田勇「ソビエトの民族学校におけるロシア語教育について パイリンガルの社会言語学的考察」『香川大学一般教育研究』36巻、香川大学一般教育部、1989年。
- V.B. レーニン(マルクス＝レーニン主義研究所・レーニン全集刊行委員会)『レーニン全集 第20巻』、大月書店、1970年。

●露語

- B.C. Доллонов*, Республика Саха - 2009, Бичик, 2010.
- B.A. Попов*, Государственные Языки в Российской Федерации, Academia, 1995.
- A.П. Притворов*, Якутия: Историко-культурный атлас: Природа; История; Этнография и др. , ИПЦ Дизайн. Информация. Картография, Феория, 2007.
- Государственная программа Республики Саха (Якутия) “Сохранение, изучение и развитие государственных и официальных языков в Республике Саха (Якутия) на 2012-2016 годы”  
[<http://sakha.gov.ru/node/53937>]
- ЗАКОН РЕСПУБЛИКИ САХА (ЯКУТИЯ) ОТ 16.10.92 N 1170-ХП О ЯЗЫКАХ В РЕСПУБЛИКЕ САХА (ЯКУТИЯ) [<http://pravo.levonevsky.org/bazazru/texts25/txt25226.html>].
- Портал "Всероссийская перепись населения 2010 года" [<http://www.perepis-2010.ru/>].
- Социально-демографический портрет России - По итогам Всероссийской переписи населения 2010 года, Информационно-издательский центр «Статистика России», 2012.